

ネジと人工衛星

世界一の工場町を歩く

塩野米松 著

今日の我が国には、グローバル社会への進展とともに、若者のものづくり離れや工場の海外移転に伴う産業の空洞化など、ものづくり産業に大きな課題がある。このような状況下で、町工場の現状を著者が聞き書きとしてまとめたのが本書である。

著者は、失われゆく伝統文化・技術の記録に精力的に取り組み、「宮大工と歩く奈良の古寺」等多数を執筆する聞き書きの第一人者である。

著者は、工業が最先端の技術を導入し、オートメーション化によって人間不在の世の中にしたと考えていた。しかし、今回の東大阪での聞き書きで町工場の主達（おっちゃん：著者が言う。）が話すことは違っていた。人間くさく人間の存在が濃いのだ。人間がいてこそ作る部品があるのだ。その部品があってこそ日本の工業が成り立ってきたのだと悟る。本書は著者による13社、17人からの聞き書きである。

まず最初に登場するのが、スプリング製造の町工場である。バネ一筋の竹山保氏は十年働いた工場から独立した。「大量に製造する機械を導入すると人は機械の番になってしまう。10万個自動化してつくる利益より、様々なバネの要請に応じてつくっとる方が儲かるんです。」と言う。しかし、竹山氏だけでなくおっちゃん達は、外国に仕事に移っていったことに大きな関心がある。「中国はどんな品物を作ろうが、金を儲ける人が偉い人や。それが評価されるねん。その気質がもう日本人とは違う。ええもの納めて金もらうのが日本人のお金の儲け方や。」と言う。

また、機械修理屋から最先端技術を駆使した部品づくりに転業した奥村義久氏は、「なんで続けなかったっていうたら、機械が電気屋の領

域に入っちゃたんですよ。時計がアナログからデジタルになって、計算機屋さんが作る時代になって、電機屋さんがカメラを作るようになったでしょ。同じことが工作機械で起こったんですよ。」と話す。また、若者の訓練には、「職人の手になって貰わんとね。手の感触や五感が大事なんです。鋳物や銅を削る匂いや切り粉の色で判断しますから、使いこなせるまで10年はかかるんじゃないですか。」と言う。旋盤工である作家の小関智弘氏が「春は鉄までが匂った。」と表現していたが、深くものづくりに携わって分かることなのであろう。

この二つの聞き書きは、第一章「信用」からの抜粋である。現在の東大阪の工場は全盛期の半分以上に減っているが、おっちゃん達は、二代目、三代目として町工場を引き継ぎ、地固めしたり転換したり、さらに改良を重ね拡大したりして工場の経営を続けている。聞き書きの随所に、自信を持って仕事を続ける東大阪のおっちゃん達のタフな力が見えてくる。著者も言うように「親を尊敬しながら自分の時代をどう生きるか。」を常に模索しているからだろうか。

さらに、「この町では人は大事な資源であった。少し大げさだがアメリカが生まれたときに似ているかもしれない。人が集まり、腕とそれが生む信頼と基礎、信頼できる物を作り出す人を大事にする新しいルールができあがっていった。東大阪市にある6000もの工場や他国の製品も競争相手である。互いに鎚を削るから腕が上がる。探求心がなければ消えていくしかない。」と著者は言う。

近年、若者の雇用状況が変化してきた。この要因は経済構造や産業構造、社会構造などが複雑に関わっているのだが、人間がどのように納得できる人生を歩むことができるのか、この聞き書きを読みながら大切なことを教わった。

（文藝春秋、221頁、770円）（田中正一）